

【研究ノート】

潜伏疑問文および関連表現における名詞句・節の交替

武 田 和 恵

Concealed Questions and Alternation between NPs and Clauses

TAKEDA, Kazue

要旨：本論文では、英語に関して観察・分析がなされてきた潜伏疑問文を出発点とし、その関連現象に着目し、日本語における対応例が、英語と同様の特性・解釈を示すかについて確認する。疑問文以外の表現にも検討対象を広げることにより、名詞句と節との対応関係に關与する要因を明らかにすることを試みる。

キーワード：補文の解釈、潜伏疑問文、平叙文、感嘆文、命令文、祈願文、名詞句と節の並行性

1. はじめに

(1)の下線部は英語における潜伏疑問文 (concealed question) の例である。形式上は関係節によって修飾された名詞句でありながら、解釈上は(2)のように主節述部がとる間接疑問文の特性を持つ。

- (1) a. John can't remember the kind of wine she likes most.
b. Susan found out the place where the meeting was to be held.
(Baker 1968)
- (2) a. John can't remember what kind of wine she likes most.
b. Susan found out where the meeting was to be held.

このように、統語的には名詞句であるにもかかわらず、対応する節の解釈を持つものには、他に潜伏感嘆文 (concealed exclamation) があり (Elliott (1974), Grimshaw (1979)), 長原 (1987) は、さらに潜伏平叙文 (concealed declaratives) という区分を立てる可能性を示唆している。

本論考では(1)(2)に対応する日本語での例および類例を観察の対象とし、上記のような名詞句と節の並行性が他の文・節のタイプ (sentence type/ clause type) および効力 (force) を伴う表現の場合、異なる具現のしかたをすることを観察した上で、潜伏疑問文・潜伏感嘆文を、節と名詞句との交替の一つのパターンとして位置づける可能性を検討する。

第2節では、主に潜伏疑問文に関してGrimshaw (1979) が提示した下位範疇化 (subcategorization) と意味選択 (semantic selection) の制約について確認する。第3節では、潜伏感嘆文、潜伏平叙文の例とともに、命令・祈願・約束・警告等の効力を持つ表現について、述部が節を選択する場合と名詞句を選択する場合について、対応関係を見ていく。第4節では、現時点での考察と残された課題を示す。

2. 名詞句・節選択における統語的・意味的制約

Grimshaw (1979) は、(3a/b) および (3c/d) の対比から、補文をとる述部動詞に疑問 (Q) の内容の補文を必要とする *wonder* のようなタイプと、疑問の内容の補文を取り得ない *think* のようなタイプ (さらには、感嘆の内容 (E) の文をとる *amazing, find out* のようなタイプ) の述部があることを捉えるため、意味選択に関する制約が必要であることを指摘している。

- (3) a. John wondered who Bill saw.
b. *John wondered that Bill saw someone.
c. John thought that Bill saw someone.
d. *John thought who Bill saw. (Grimshaw 1979)

他方、意味選択に関する制約を満たしても、(4a/b) (5a/b) にみられる対比があることから、統語的な下位範疇化に関する制約がさらに必要であることも指摘している。

- (4) a. Only Harold knew what kind of candy Jill likes.
b. Only Harold knew the kind of candy Jill likes.
- (5) a. I wonder what answer he gave.
b. *I wonder the answer he gave. (Grimshaw 1979)

(4)の*know*は、名詞句・節の何れによっても下位範疇化されるタイプの動詞であるため、wh句を節頭に置くwh節が後続することも、名詞句が後続することも許す。(4b)は、動詞が名詞句をとり、かつ疑問節として解釈される、潜伏疑問文の例となっている。一方、*wonder*は、wh節によって下位範疇化はなされるが、名詞句をとる特性は持たない。そのため、(5b)は非文法文となっている。

日本語においても、通常は疑問節をとる動詞が名詞句をとり、疑問節として解釈される例がある。

- (6) a. 太郎は、花子がどの本を読んだか知っている。
b. 太郎は、花子が読んだ本を知っている。

(6b)で、動詞「知っている」が取っているのは関係節によって修飾された「本」を主要部とする名詞句であるが、意味的には(6a)の下線部と同じ解釈となり、潜伏疑問文となっている。

(6)の日本語の例においては、疑問節と名詞句との間の構造的な並行性は、英語の場合ほど緊密ではない。(6a)の日本語の例では、疑問詞「どの」と「本」は目的語の名詞句内にとどまっておろ、(6b)では、「本」は英語と同様、主要部の位置にあるが、音形を伴う「どの」に対応する要

素は存在しない。表面的には、統語的な並行性が英語の場合ほど見られないにも関わらず、(6a)の下線部に対応する疑問表現として(6b)の名詞句を解釈することは、全く問題がない。このことから2つの可能性が考えうる。[1]日本語の疑問詞は、表層では疑問節のCP指定辞に移動しないが、LF(論理形式)の標示レベルでは、英語と並行的な構造をしており(Huang 1982, Watanabe 1992)、日本語の潜伏疑問文と埋め込まれた疑問文(間接疑問文)は、英語の場合と同様の統語的・意味のプロセスを経る。[2]潜伏疑問文が間接疑問文と同様の意味解釈となるメカニズムは、意味的なものであり、言語によって統語的な構造・標示が異なっても影響しない。wh要素が表層で移動するタイプの言語と文中に残るタイプの言語の対照研究は、1980年代より数多くなされているが、本稿では、これら2つの可能性の指摘にとどめ、これ以上の検討は控える。

次節では、さまざまな文・節のタイプおよび効力を伴う表現のタイプに関して、節と名詞句の交替の可否を比較していく。

3. 疑問以外の文・節のタイプおよび効力を伴う表現

2節では、主に動詞の補文として疑問節が生じる例と対応する名詞句が潜伏疑問文として解釈される例を検討してきた。本節では、感嘆文・平叙文・命令文・祈願文など他のタイプにおいて、節と名詞句がどのような表現の並行性を持ちうるか、確認する。

(7) 感嘆文

- a. 次郎はなんと高い山に登ったのだろう。
- b. 太郎は、次郎が高い山に登ったことに驚いた。
- c. 太郎は、次郎が登った山の高さに驚いた。
- d. #太郎は、次郎が登った高い山に驚いた。

感嘆文においては、感嘆の内容を補文として埋め込んだ(7b)に対応

する解釈が、(7c) の名詞句「次郎が登った山の高さ」においても得られる。ただし、前節の潜伏疑問文の場合と同様、感嘆を表す表現「なんと高い山」は補文の元の位置にとどまっておらず、英語の感嘆文において、感嘆の焦点が*what/how*を伴って文頭に移動することとは対照的である。また、潜伏疑問文との相違として、「高い」に対応する「高さ」が感嘆すべき対象・量として明示的に示されている点がある。「山」を関係節の修飾対象とした(7d)は、感嘆の対象が山の高さではなく、山そのものの有りようとして解釈されることから、意図した解釈とは異なるものと判断し(#)を付与している。

(8) 平叙文

- a. その計画は順調に進行している。
- b. 太郎は、その計画が順調に進行していると報告した。
- c. 太郎は、その計画の順調な進行／進み具合を報告した。
- d. #太郎は、順調に進行している計画を報告した。

平叙文においては、(8b/c) にみられるように、補文の述部動詞に対応する名詞句を主節動詞の補部とすることで、同等の解釈を表現できている。ただし、ここで注意が必要なのは、英語の潜伏疑問文・潜伏感嘆文と異なり、補文が関係節となることで名詞化がなされているわけではなく、補文動詞が派生名詞となることで、節全体が名詞化されている点である。無理やり、補文内の名詞を関係節の主要部においた(8d)の例は、解釈が異なるものとなっている。

(8)の平叙文と同様のことは、(9)命令文や(10)祈願文でも観察される。命令・祈願の内容を表す補文に対応する派生名詞を主要部とする名詞句を用いた(9c)(10c)の例は、対応する(9b)(10b)の例と同等の解釈が可能である。しかし、補文内の名詞を無理やり関係節の主要部とした(9d)(10d)の表現は、非文法的である。

(9) 命令文

- a. その服を捨てなさい。
- b. 太郎は、花子にその服を捨てるよう命じた。
- c. 太郎は、花子にその服の廃棄を命じた。
- d. *太郎は、花子に捨てる服を命じた。

(10) 祈願文

- a. 花子が大学に合格しますように。
- b. 太郎は、花子が大学に合格するよう祈った。
- c. 太郎は、花子の大学への合格を祈った。
- d. *太郎は、花子が合格する大学を祈った。

この他にも、主節表現として形式化・文法化が上記の例ほど確立していないが、約束・示唆・謝罪・宣言・拒絶などの主節表現を補文の位置に埋め込み、名詞化する際にも、平叙文・命令文・祈願文のように補文動詞の名詞派生形が使用される。

(11) 約束

- a. (太郎の花子への発話) 私は次の会議に参加します。
- b. 太郎は、花子に次の会議に参加することを約束した。
- c. 太郎は、花子に次の会議への参加を約束した。

(12) 示唆

- a. (太郎の花子への発話) 周囲に積極的に働きかけるべきだ。
- b. 太郎は、花子に周囲に積極的に働きかけるよう促した。
- c. 太郎は、花子に周囲への積極的な働きかけを促した。

(13) 謝罪

- a. (太郎の花子への発話) 本を盗んですまない。
- b. 太郎は、花子に本を盗んだことを謝った。
- c. 太郎は、花子に本の盗みについて謝った。

(14) 宣言

- a. (太郎の発話) 話し合いを開始します。
- b. 太郎は、話し合いを開始すると宣言した。
- c. 太郎は、話し合いの開始を宣言した。

(15) 拒絶

- a. (太郎の花子への発話) 私はあなたに車を貸せません。
- b. 太郎は、花子に車を貸すことを断った。
- c. 太郎は、花子への車の貸し出しを断った。

以上の例をみると、潜伏疑問文においては、補文動詞の名詞化ではなく、補文内の名詞を主要部として名詞修飾構造を作ることにより、補文と並行的な内容を表すのに対して、感嘆文を含め、それ以外の例においては、補文動詞・述部の派生名詞を使用することにより、補文に対応した名詞句表現を作り出していることが確認できる。逆に、潜伏疑問文において、補文述部に対応する派生名詞を補部とする表現をつくると、潜伏疑問文としては解釈しえない。

(16) *太郎は、花子の（どの）本の読書を知っている。

潜伏疑問文と類似のメカニズムを利用している候補としては、比較構文が挙げられるが、(17)で、関係節による修飾の対象となっているのは、「量・数」という形式性の高い名詞である点で、潜伏疑問文とは違いがみられる。

(17) 比較表現

- a. 花子は 良子が本を読んだより、多くの本を読んだ。
- b. 太郎は、花子と良子がどれくらい本を読んだか（を）比較した。
- c. 太郎は、花子と良子が本を読んだ数・量を比較した。
- d. # 太郎は、花子と良子が読んだ本を比較した。

以上、ある種の効力を伴う表現を補文としてとる述部を、対応する名詞表現と組み合わせる際、疑問表現をとる場合と、それ以外の場合では、名詞表現の形式が大きく異なることを確認してきた。統語的には、同様に名詞句を選択していることから、これらの違いについては、述部が必要とする意味的な条件が、疑問とそれ以外の表現では異なることを示唆している。

4. 終わりに

本論考では、英語での潜伏疑問文にみられる補文と名詞句の対応関係を出発点に、対応する日本語表現が、どのような振る舞いをするかについて検討し、さらに他の効力を伴う表現での節と名詞表現の対応関係を検討した。日本語の潜伏疑問文の例においては、疑問節と名詞句との間に構造的な並行性は英語の場合ほど、緊密ではないにも関わらず、同様の解釈が得られることに関して、2つの可能性を示唆した。同様の違いは、潜伏感嘆文にもみられた一方で、*wh*演算子が関与しないと考えられる命令その他の表現においては、節と名詞句の間に異なる交替のパターンが見られることを確認した。現時点では、文・節のタイプおよび効力のタイプが統語構造・意味解釈とどのように関わっており、また名詞化のパターンとどのように関係づけられるかという点に関しては、検討できておらず、今後の課題としたい。

参考文献

- Baker, C.L. (1968) *Indirect Questions in English*. Doctoral dissertation. MIT.
千葉修司. (1977) 「潜伏疑問文とwh句の意味解釈について」『英文学研究』54巻, 67-179
Chomsky, N. (1970) Remarks on nominalization. In Jacobs and Rosenbaum (eds.) *Reading in English Transformational Grammar*, 184-221. Waltham, Mass.: Ginn and Company.
Elliot, D. (1974) Toward a grammar of exclamation. *Foundations of Language* 11.2: 231-243.
Grimshaw, J. (1979) Complement selection and the Lexicon. *Linguistic Inquiry*, 10.2: 279-326.
Huang, C.-T, J. (1982) *Logical Relations in Chinese and the Theory of Grammar*.

Doctoral dissertation, MIT.

Larson, R. (1991) Promise and theory of control, *Linguistic Inquiry* 22.1; 103-139.

長原幸雄 (1990) 『関係節』 大修館.

Watanabe, A. (1992) Subjacency and S-structure movement of *wh-in-situ*. *Journal of East Asian* 1.3: 255-291.